慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	塚原仁著 人口統計論
Sub Title	
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.11 (1940. 11) ,p.2215(121)- 2218(124)
JaLC DOI	10.14991/001.19401101-0121
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19401101-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

主張し、統計學と推定學との區別を要求してゐる。彼の所謂二元性とは、統計學の認識目的は「大數法則に照應する結果」であると共に、「かゝる蓋然論的見地が全然何等の役割も演ぜざるが如き別箇な結果(大量の範圍及び構造の報告等)」でもあるといふのである。この理論的對立に極めて困難なる問題を包藏して居り、之が解決は我々に課せられた最も重要な問題の一つである。併しこの章に於ては杉教授の積極的意見は窺ひ得ない。最後の第十二章は「數學的方法の精密なる理解、材料に關する科學的思惟、材料及び材料の背後に存在する自然的社會的背景とに對する充分なる理解の下に行はれる特有な推論方法が統計的解析法の方法形態」なることを說明し、かゝる統計的解析法の一例としてグレーブネル博士の「移動季節變動指數」を紹介したものであつて、經濟統計の觀點から極めて興味ある一文である。

既に述べた通り、本書では教授は統計的方法のうちその一半たる大量觀察法のみを問題とされたに過ぎぬ。從つて他の一半たる統計的解析法が充分に論述されて始めて教授の所謂一般理論の體系が構築されるわけで、本書が單に理論統計學研究と題されてゐるのも之がためであらう。この殘された他の半面が、こゝに取扱はれた半面と同樣の創意と透徹を以て示されんことは、獨り私のみの念願ではなからう。(立命館出版部發行、定價三圓八十錢)

(一九四〇・一一・一七)

塚原仁著「人口統計論」

寺尾琢磨

高崎高等商業學校教授塚原仁氏の「人口統計論」は人口學界の最近の一收穫である。序文に曰く「今や人口問題は東亞新秩序建設の一翼として其重大性が認識せられ、活潑なる論議の的となつてゐる事は周知の如くであるが、其中心問題の一は云ふ迄もなく出生減退である。而して此問題たるや其自身之を切離して考慮すべきものに非ずして、人口の構成、其發展、更に婚姻、死亡等の諸事象との有機的關聯に於て之を考察するに非ざれば、其眞相は到底之を把握するを得ざるべく、又從て其眞の對策も之を樹立するを得ないであらう。玆に一般的なる人口の統計的研究の必要が見らるゝのであつて、未だ本書に於て此問題は殆ど取扱はれてはゐないけれども、上記の意味に於て此事象をより大なる視野に於て眺めんとする云はゞ準備過程的意義を本書に認め得るとするならば、私の深く喜びとする所である」と。

本書は二編より成り、第一編「人口統計序說」では人口統計の概念、人口統計調査、統計解析略說の三章を收めてゐる。氏は人口統計學なる獨立的科學の可能性を、その歷史的事由と統計的研究對象としての人口の特異性との二つから肯定するものゝ如くである。統計解析略說は文字通り略說で、僅か十三頁のうちに比例數から始つて相關々

係に至る統計技術を說明しようとするのは聊か無理である。この種の著作の讀者は恐らくは一と通りの統計學的素養はあるべき筈であるから、もし敢へて解析の說明をするならより專門的な、例へば各種の出生率、死亡率、增加率、壽命、將來人口測定法等を述ぶべきではなかつたらうか。何れにせよ第一編は全部を合せて四〇頁そこ〳〵に過ぎず、三五〇頁に垂んとする第二編だけが本書の內容と見てよからう。

第二編は「男女の割合に就て」以下十一章より成る。第一章では男女の割合について歐羅巴及び我國の人口に現はれた特徵を概說し、その原因にも觸れてゐる。氏は我國に於ける男性超過は女子死亡率が比較的に高い爲ばかりでなく、一般に出生率が高いからだと言はれてゐるが、確かにその傾きはあるであらう。第二章「年齡構成の變化とその意義」の終りの部分には子供の多少と其經濟的意義なる一節がある。氏は「小供の少い事は……生產の方面より云ふも、又消費の方面より云ふも、決して望ましい事ではない」との結論を揭げてゐるが、その理論過程は恐ろしく單純で、經濟學關係者の態度としては首肯し兼ねるものがある。出生減によつて失業が減少しないことは、否寧ろ增加さへするであらうことは、確かに氏の言はれる通りである。併し失業の增減だけが所謂經濟的意義なのであらうか。生計費や物資などの問題は度外視してよいのであらうか。折角かゝる重大な問題を採り上げるなら、せめて一章をこれに割いて評論していたゞきたかつた。

次の「我國に於ける配遇關係別人口構成に就て」では性別、年齡別、都鄙別の配遇關係の相異を述べ、更にその發展の樣態と方向を獨逸との對比によつて說明してゐる。次の「婚姻統計の若干問題」は主として婚姻率と性比との關係を取扱つたもので、相關圖や退行線を使用した全くの統計學的研究である。續く「婚姻年齡に就て」では我國の婚姻が次第におそくなりつゝある事實を婚姻の平均年齡及び婚姻年齡の分布から證明し、結論に於て早婚の必要を說いてゐる。素より氏も、婚姻年齡の問題は單に生理學的觀點のみより解決さるべきものではなく、問題は云はゞ此自然的婚姻年齡とも稱すべき生理學的に身心發達完成年齡に到達せる者をして直ちに婚姻に入らしむることにあるよりも、寧ろ彼等をして婚姻生活に入るを得ざらしむる社會的經濟的障碍の除去に在る事を忘れてはならぬ」と論じてゐるが、この重要問題を僅か一行で片づけて了ふのは聊か物足りない。且つ婚姻年齡と產兒數との關係が閑却されてゐるため、結論の要旨も迫力を帶び得ない。

次の「出生に於ける男兒超過に就て」に於ては、この現象の恒常性を種々なる角度から證明し、結論して曰く「元來出生、從つて出生兒の性別は生理的に規定さるゝものである。故に統計的に男兒出生超過なる事象が諸種の經濟的、社會的、自然的事情と或種の相關を示すことが出證されたとしても、未だそれを以て直に何故に男兒出生超過があるかの間に對する解答は與へられたりとする事は出來ない。……此問題は社會的でも、道德的でもなく、實に生理學的なものである」と。併し氏も立證されてゐる都鄙別その他の人口階層による比率の相違は畢竟は社會的要因に基くものではないのであらうか。氏の言ふ「生理學的」の意味に從へば、例へば職業別の出生率や死亡率の差も亦單なる生理學的現象に過ぎず、社會科學の研究領域ではないといふことになる。我々にとつて必要なことは、斯かる生理的現象の背後にあつてそれを動かす社會的要因を究明することではなからうか。殊に氏は續く「死產統計論」において、「死產中には社會的悲慘や道德的頹廢に因由するものも存在する」と斷言されてゐる。死產それ自身は勿論生理學的現象であるが、それだけで濟まされないところに人口統計學の存在意義があるのである。

以下は「死亡に於ける男女の割合」、「乳兒死亡率の諸問題」、「日淸・日露兩戰役と我國人口動態」の三章と、八〇頁に近い紙面を占める「ラヴィノウィッチ氏の佛蘭西の人口問題」の一章である。この最後の一章はラヴィノウィッチ氏

塚原仁著「人口統計論」

の「佛蘭西に於ける人口問題」の第二編の紹介である。該書はデモグラフィーと唯物論との關聯を論じた序文によつて著名であるが、この部分は全く割愛されてゐる。氏の紹介は大體原書に忠實であり、殊に最近の分に對しては別の資料を以て補ふ勞苦をとられてゐる。

之を要するに本書は豊富な統計的資料を取扱ひながら、その結論は何れも少からず常識論的で、資料の内容に適はしくない。殊に社會科學的背景の乏しいことは本書の最大の缺陷であらう。併し少くとも統計的立場から見れば、本書は確かに優れた著作であつて、殊に著者の眞摯な態度には少からざる好感がもてる。敢へて同學の士に一讀を薦める所以である。（千倉書房發行、定價三圓二十錢）

前號（第三十四卷特別號）目次

道路交通の安全と自動車速度の制限に就て　増井幸雄
有機的貸借對照論に就て　三邊金藏
德川時代村落研究序說　——その動態的研究——　野村兼太郎
新體制と統制經濟　加田哲二
計畫化と統制　——（國土計畫の政治的性格）——　奥井復太郎
世界經濟新秩序と國際經濟體制　金原賢之助
國家政策に於ける統計の任務と限界　尾琢磨
勞働者政策の基本問題　藤林敬三
財政學の理論的課題　——財政學の自己反省のために——　永田清
國防經濟欲求　武村忠雄
地理學的研究の對象と課題　小島榮次
勞務管理に對する若干の考察　小高泰雄
中世諸威の農地世襲　——グッラ民會法律書を中心として——　高村象平
農業の經營規模について　小池基之
商業學の對象と體系　岩田似
大陸政策の展開過程　山本登
新東亞指導理論の瞥見　望月玉三
消費性向と乘數理論　千種義人
「テヒノロギー」の系譜　豊田四郎
正價思想史概觀　高橋誠一郎

●一冊定價金五拾錢　郵稅金壹錢五厘
●半ケ年分金貳圓九拾錢
●一ケ年分金五圓四拾錢　郵稅共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十五年十月廿五日印刷納本
昭和十五年十二月一日發行　毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第三十四卷第十一號

東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
編輯兼發行者　江田範保
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷者　金子鐵五郎
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷所　金子活版所

東京市芝區三田二丁目一番地
發賣元　丸善株式會社三田出張所
電話三田(45)一一九二六番
振替口座東京一一九二七番
東京芝三田慶應義塾内
發行所　理財學會
振替口座　東京一八二〇四番　芝區三田二ノ二　慶應義塾内

●尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す